

Title	異界と現を繋ぐ橋 -- 「マンガ肉と僕」で巡る京都
Author(s)	山本, 博之
Citation	マンガ肉と僕 (2016)
Issue Date	2016
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/229080">http://hdl.handle.net/2433/229080</a>
Right	発行元の許可を得て登録しています.
Type	Article
Textversion	publisher

# 異界と現を繋ぐ橋——『マンガ肉と僕』で巡る京都

山本博之（京都大学地域研究統合情報センター准教授）

京都を舞台にして川の傍や橋の上での夜の場面が多いためあってか、『マンガ肉と僕』はどこか異界感を漂わせている。はじめサトミに「寄生」されたワタベが菜子やさやかに「寄生」し、女たちはそれぞれ成長していくがワタベは置き去りにされるとい人間たちの物語の合間に、異界が隙を見ては人間たちの目を盗んで赤い舌をちろちろと覗かせている。

ワタベが自転車で二つの橋を渡り、鴨川の東側に足を踏み入れることで物語が始まる。橋から始まるこの物語には多くの橋と川が登場する。ワタベは菜子と鴨川の四条大橋で待ち合わせ、祇園白川の異橋でお好み焼きを食べ、白川の一本橋（行者橋または阿闍梨橋とも）で告白する。さやかとは湖畔で出会い、琵琶湖疏水に沿った哲学の道の辰巳橋あたりを散策する。そしてサトミとは一本橋傍の古川町商店街で再会する。

菜子とサトミの一本橋を除けば三人の女が関わる橋と川はいずれも別々のものだが、実際にはこれらの川は全部繋がっている。さやかと出会ったのは京都から離れた琵琶湖の近江白浜だろうが、そこも疏水で繋がっている。陸上の道を移動する私たちには見えない何かの道筋があつて、三人の女はそれを通

じて何物かと繋がっており、ワタベの状況にあわせてそれぞれ化身して姿を現しているかのようだ。この女たちは水との縁が深いようだ。とりわけ菜子は、興奮するとシャワーを浴び始め、自分の体が臭いからと言うが、水に触れると気分が落ち着くのを誤魔化しているのだろうか。京都で人を化かすと言えは狸か天狗だそうだが、ワタベと菜子がデートした異橋は、かつて橋を渡る人々を狸が化かしていたへん困ったため、祠を建てて狸を祀ったところ悪戯が止まったと言ひ、そのため橋の向かいの辰巳神社には狸が祀られている。

橋は、端と端の間に渡して繋ぐものに由来すると言われる。橋とは「こちらの世界」の端と「あちらの世界」の端を繋ぐもので、やや大げさに言えば、橋は異界との境界ということだ。冒頭の自転車で乗ったワタベをカメラが追いかける長い場面は、ワタベが二本の川を渡って「こちらの世界」に入ってくることで物語が始まるぞという異界側の視線を暗示しているかのようだ。ワタベが自転車で渡った出町橋の西詰には妙音堂があつて弁財天が祀られている。ここを通りかかったときに水の女神に目を付けられたのだろうか。

もつとも、サトミは橋や川とは縁遠そうな怪しげな茂みで夜中に肉を焼いているし、北野天満宮傍の上七軒で料理の修行をしており、菜子とさやかが基本的に鴨川に連なる水系に沿って鴨川の東側にしか登場しないのに対し、サトミの行動範囲は鴨川の水系を大きく越えている。サトミは京都の街を東へ西へと動くたびに生活道具一式を入れた旅行カバンを引つ張っていくが、なぜか傘は持っていないようだ。晴れ女だから傘がいらぬのか、それとも傘をどこかに置いてきてしまったのか。

橋が「こちらの世界」と「あちらの世界」をつなぐ狭間だとすれば、『マンガ肉と僕』は狭間にいる人たちの物語ということになる。狭間にいる人は「こちらの世界」と「あちらの世界」のどちら側にも自分の居場所がないと考えられがちだが、見方を変えれば狭間にいる人とは両方の場所に足場がある存在だ。一つの場所に縛られないことから利害関係やしがらみから自由で、よその世界の考え方や道具を持ち込むことができるため、狭間にいる人は新しい価値をもたらしうる。また、複数の場所に足場があると、仮に失敗しても立ち直りが早いいため、新しいことに挑戦しやすくなる。歴史をひも解いてみると、いつの時代でもどの地域でも、世の中の問題にいち早く気づき、そこに働きかけて世直しを先導してきたのは、いろいろな意味で狭間にいる人たちだった。

狭間にいる人たちが新しい価値を作ってきたことは、『マンガ肉と僕』の舞台である京都の魅力と重なる。アジアの人気観光都市の一つで、日本国内はもと

より世界各国から多くの訪問客が訪れる京都の魅力は、千年を超える歴史によって培われてきた伝統の美意識や技術にある。ただし、古いものを古いまま残すのではなく、古くからの心を大切にしながらも、絶えず外の人を迎え入れ、新しいものを取り入れることで成長してきた。世界各地とリわけアジアにルーツを持ちながら京都に迎え入れられた人や物が、地元と時代の二方向から練り上げられて新しい伝統が作り出される。それゆえに、世界中を探しても他にはなく、しかしアジア各地のどここの人にとつてもどこか懐かしく心惹かれるものがそこにある。『マンガ肉と僕』の舞台をあえて京都にしたのは、映画でそれに挑戦するというマニフェストだろう。

橋で始まった物語は門で終わる。律儀にワタベに借りを返したサトミは、山門の奥に向かって歩いていく。絵面だけ見ると門を出てどこかに去っていくかのように、物語を終えて人里離れた異界に帰っていくかのようにも見える。ただしこの門は知恩院古門で、実際には門から出ていったのではなく、門から寺に入ろうとしている。いつもの旅行カバンを持っていないということは、サトミの住い知恩院のあたりなのだろうか。

浄土宗総本山の知恩院は七不思議で知られ、その一つに「忘れ傘」がある。かつて御堂建立によって白狐の住むところがなくなつたため、白狐に新しい住み家を作つてやつたところ、そのお札に傘を置いていったと伝えられている。律儀な白狐が残っていた傘は今も寺に置かれている。